



Title	セルビアのポピュラー音楽「ターボフォーク」における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践
Author(s)	上畑, 史
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76328
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 上 畑 史 ）	
論文題名	セルビアのポピュラー音楽「ターボフォーク」における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践
論文内容の要旨	
<p>本研究は、西欧とトルコに挟まれたバルカン半島の一国セルビア共和国で、ユーゴスラヴィア民族紛争が勃発した1990年代に成立したポピュラー音楽「ターボフォーク」を研究対象とし、多層的な民族・宗教的帰属意識および特殊な地政学的問題を孕んだ地域で形成された民族的アイデンティティと当該音楽の相関、ならびに当該音楽の文化的意義を明らかにすることを目的としている。</p> <p>ターボフォークとは、セルビアおよびバルカン地域の民俗音楽を特徴づける多様な音楽要素が、欧米のナイト・クラブから世界に拡散される若者向けのダンス・ミュージックと融合したポピュラー音楽である。ターボフォークは、ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国の崩壊をもたらした民族紛争（1991～99年）のさなか、同連邦の一構成国であったセルビアが、国連による経済制裁（1992～95年）を受け、国際的な孤立状態と混乱した政治経済環境に置かれていた時代に興隆し、瞬く間に同国の音楽市場と放送メディアを席卷するメインストリームの音楽・文化となった。以降、現在までセルビアの人々の結婚式や新年などの慶事に欠かせない音楽として親しまれるとともに、若者を惹きつける流行の音楽として発展し続けてきた。</p> <p>その一方で、ターボフォークは成立当初から、知識層やジャーナリズムや一部の民衆から激しく批判されてきた。批判の理由は、その正否は別として、①非セルビア的な「オリエンタル」な音楽的特徴、②直截的で扇情的な歌詞と視覚表象、③ターボフォークの大衆文化席卷に起因する芸術文化の衰退、④90年代に民族主義を扇動したミロシェヴィッチ大統領や反社会勢力と音楽業界との人的繋がり、主に以上の4点に集約できる。</p> <p>民族紛争が終結するとともに政権交代が起こった2000年以降、90年代を彩ったターボフォークへの批判はますます激化した。批判的な風潮を背景に2007年には、実在するターボフォークの歌手や業界関係者の顔写真を用いてアニメのキャラクターに仕立てた、アニメ映画『ジェット・セット』<i>Džet set</i> が公開される。劇中では、これらのキャラクターがターボフォークを抹殺しようと地球にやってきた宇宙人たちに、次々に射殺されるシーンもあり、アニメとは言え衝撃的である。このようにターボフォーク批判は、公然と展開されてきたのである。</p> <p>ターボフォーク研究は90年代末から主に社会学や文化研究の領域で活発化し、特にターボフォーク批判に関しては2000年代以降、セルビア内外の多くの先行研究において言説分析がなされ、一定の成果を上げてきた。だが、特に初期の先行研究では批判を前提とする研究者の態度が多分に反映されており、またそれ以降の言説研究においても批判的な言説の整理・分析に留まり、ターボフォークの音楽・文化の実態がみえてこない。歌詞におけるマッチョイズムや女性歌手の扇情的な表象にも特徴があるターボフォークは、フェミニズム的な観点からも研究がなされてきたが、それらの報告もまた、ターボフォークの表層的かつ一面的な解釈であると言わざるを得ない。</p> <p>ただし近年では、ターボフォークの文化的な意義に迫ろうとする研究が、従来ターボフォークを学術研究の対象としてこなかった音楽学や芸術学の分野においてみられるようになってきている。しかしながら、近年の研究も含め、先行するターボフォーク研究では当該音楽の担い手や受容者の見解が反映されることは少なく、稀にあったとしてもマスメディアでの発言の切り取りや受容者への聞き取りに限定されている。</p>	

そのような意味で、受容者だけでなくターボフォークの業界関係者・歌手・作り手へのアプローチから直接得られた見解を分析材料とする本論文は、ターボフォーク研究に新たな視座をもたらし、ターボフォークの音楽・文化の実態とその文化的意義の解明に寄与するものであると考える。

また本論は、社会や音楽産業の局面において生じ、ターボフォークの展開に影響を及ぼしたものとして、従来のターボフォーク研究で報告されてきた事象についても、新聞記事の分析や当時を知る関係者の聞き取りによって再点検し、その実態を再検証する手段を採った。そうした事象は、言説分析に重点を置く先行研究の多くにおいて、断片的にしか扱われてこなかった。また前述したように、ターボフォークが社会主義の崩壊と民族紛争の勃発に特徴づけられる、90年代という極めて政治的な時期、あるいは文化的価値観が変貌した時期に生じたために、ターボフォークを取り巻く事象にも、研究者個人の政治的志向や文化的嗜好が反映されがちであったからである。こうした手段を採用したことにより、本論文では時代を追うかたちで議論を進め、時代毎の音楽的・文化的側面の特徴・変化を、政治的・社会的要因と関連づけながら抽出することに重点を置いた。

その一方で筆者は、ターボフォークに対する人々の肯定的あるいは否定的認識を最も左右するものとして、ターボフォークにおけるオリエンタル（バルカン的／トルコ・アラブ的）な音楽的・文化的要素にも着目している。オリエンタルな音楽的・文化的要素の大部分は、セルビアが近代まで400年以上に渡り、オスマン帝国に支配されていたことに起因しており、近代以降これらの要素をめぐる言説が同国で蓄積されてきた。こうしたことから、本論文の分析対象は、ターボフォークが生じる90年代より前の時代の音楽・文化にも割かれている。

まず、第1章ではターボフォークの起源となる音楽として、19世後期から20世紀初頭に隆盛したカフェナ（酒場）の音楽および、それを包摂する「街の民俗音楽」に着目し、その様相を明らかにする。

第2章では、ターボフォークの批判的な見方の基礎が構築された時代であるという見立ての下、その原因となった国家による音楽文化への介入と、社会主義時代のセルビアを代表するポピュラー音楽の領域で確立された文化的なヒエラルキーについて分析を行った。

第3章では、ターボフォークの萌芽期である80年代末から90年代前半の大衆文化およびターボフォーク移行期の音楽の様相について議論した。

第4章は、ターボフォーク発展期である90年代半ばから2000年代までを対象とし、この時期のターボフォークを取り巻いた言説を再検証した。

第5章では、2010年代から現在までのターボフォークの音楽産業の変化に焦点を当てる。セルビアに限らず、この時期にインターネットやデジタル音源の普及により音楽環境が世界規模で変貌するが、これがターボフォークの音楽産業の構造にどのような変化をもたらしたのかを分析した。

第6章では、90年代後期に音楽的側面において先に顕在化し、2000年代以降には歌詞の側面においても際立つ特徴となったターボフォークの汎バルカン的な傾向に着目し、その文化的な意義を解明した。

以上によって、様々な言説に覆い隠されてきたターボフォークの音楽的・文化的な実態を解明した。

また、これらすべての成果を総合し、本研究において課題とした、セルビアのポピュラー音楽「ターボフォーク」における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践を明らかにした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (上 畑 史)			
	(職)	氏	名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	伊東 信宏
	副 査	大阪大学 教授	永田 靖
	副 査	大阪大学 准教授	輪島 祐介
	副 査	国立民族学博物館 教授	寺田 吉孝
論文審査の結果の要旨			
<p>以下、本文別紙</p>			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： セルビアのポピュラー音楽「ターボフォーク」における
民族的アイデンティティの表出とその文化的実践

学位申請者 上畑 史

論文審査担当者

主査 大阪大学教授	伊東 信宏
副査 大阪大学教授	永田 靖
副査 大阪大学准教授	輪島 祐介
副査 国立民族学博物館教授	寺田吉孝

【論文内容の要旨】

本論文が対象とするのは、セルビアにおいて 1990 年代から大流行した「ターボフォーク」と呼ばれる大衆音楽のジャンルである。このジャンルは、「フォーク」（民俗音楽、民謡）の要素が、音楽的、視覚的、歌詞内容などの面で認められ、さらにそれを欧米のポップ・ミュージックのリズムや楽器法で「加速した」（「ターボ」はターボエンジンの過給機に由来する）音楽と規定されてきた。1990 年代の旧ユーゴ内戦期に急成長し、ミロシェヴィッチ政権の「サウンド・トラック」とまで言われ、内戦終結後も若者たちに絶大な人気を博したが、一方で知識人からは、その「後進性」を厳しく非難されてもきた。

本論文は、このようなセルビアの「ターボフォーク」を、セルビアの大衆音楽史の中に位置付け、さらに現代における問題についていくつかの観点から分析を加えている。全体は序章、結論の他に第 1 章から第 6 章までの 6 つの章から成る。序章で目的、方法、構成が簡単に規定された後、第 1 章「セルビアにおけるポピュラー音楽前史」は、第 2 次世界大戦前のセルビアにおける民俗音楽の諸ジャンルを扱う。とりわけオスマン帝国支配に起源があるとされる「セヴダリンカ」が後の「新作曲民謡」につながってゆく点などが論じられている。第 2 章は「旧ユーゴ時代のセルビアのポピュラー音楽」と題され、冷戦期の大衆音楽状況が論じられる。この時期、旧ユーゴスラヴィアは東側ブロックの一員としてスタートするが 1948 年のコミンフォルム除名により、西側にも緩やかに開かれた独自路線を歩むことになった。この独特のあり方を反映した音楽ジャンルが、この時期に発展した「新作曲民謡」（匿名の誰かによって作られ代々受け継がれてきた「民謡」とは異なり、特定の作曲家が作った民謡調の音楽）である。第 3 章「ターボフォークの萌芽」では、社会主義体制末期の 1980 年代から冷戦終結後の 1990 年代前半を扱う。この時期、まだ「ターボフォーク」というジャンル名は確立していないが、それまでの「新作曲民謡」的なものをパロディ化するなかでその萌芽が生まれていた、と考えられる。一方、第 4 章は 1990 年代後半以降の「ターボフォーク発展期」を扱う。ここで特に論じられているのはこの時期の「ターボフォーク」の発展に大きな影響をもたらしたテレビ局「ピンク」である。さらに第 5 章は「ターボフォークの成熟」と題され、やはり同時期にターボフォークの展開に影響力を持ったプロダクション「グランド」を中心として記述している。

「グランド」はオーディション番組「グランド・スター」により多くのターボフォーク歌手を発掘、プロモートしたが、2007 年頃から路線を変更し、ターボフォークの中のオリエンタルなスタイルを排除しようとした。これによって若者が支持する音楽はより多様になり、ヒップホップとの融合なども進んだ。そして第 6 章は「2000 年代以降のターボフォークにおける『バルカン』の理想化」と題されている。ここでは現代のターボフォークの中で特殊な意味合いで用いられる「バルカン」の概念を再検討している。そして論文の最後では、ターボフォークは、バルカンの文化に対する既成のイメージを「再盗用」(reappropriation) し、自文化を補強しようとするものだった、という結論を導いている。

本文は A4 判 128 頁。加えてセルビア語文献を主体とする参考文献表 (13 頁) から成る。本文中には図版、譜例が数点含まれる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文に関する口頭試問は、2020 年 1 月 24 日 (金) に、およそ 2 時間にわたって実施した。試問の中で、まず評価されたのは、本論文がセルビアの現代の大衆音楽ジャンルという特異な対象に真っ向から取り組んでおり、主としてセルビア語の資料を駆使しながら、セルビアの大衆音楽史について、一貫した叙述を展開したことである。日本語はもちろん、英語でも類書は存在せず、本論文は「ターボフォーク」に関する先駆的なモノグラフとして重要な意味を持つ。

だがここにはまだ物足りないところも散見される。特にターボフォークをセルビア以外の音楽との関連の中に位置付ける点では不十分で、たとえばトルコの「アラベスク」との関連は重要だろうし、旧ソ連のポピュラー音楽の動向というのにも必要な視点だったのではないか、と思われる。またターボフォーク自体についても、たとえば 2000 年代に百花繚乱の感があったターボフォークの様々な歌手たち、とりわけ有名なヒット曲、様々な試みられた他のジャンルとの融合、などについて、大まかな見取り図と個別の曲についての音楽的検討、歌詞の検討などが必要だったと思われる。あるいは論文後半では、本論のような歴史的な叙述を踏まえた上で、「音楽的特徴」「演唱、受容の場」「ジェンダー」「言説」などについて横断的な論じ方をすることもできたのではないか、という指摘もあった。また論文中では重要な役割を演じる「自己異国趣味化」という概念について、それがどういう背景を持ち、どのような問題と関連づけられてきたかについて、より慎重な検討が必要だった、という意見も出た。さらに、このような大衆音楽研究では常に警戒すべきだが、その音楽の「属性」としての傾向と、それが実際にどのように「機能」したか、という問題とは分けて考えるべきであり、「ターボフォーク」も作り手、送り手の側の意識とは別に、それが現状どのように「機能」しているかという点を考えてみれば、一種の「大セルビア主義」を担わされているということを考えておくべきだ、との指摘もあった。そして第 4 章などで論じられているラジオ局の問題については、プロデューサー名ばかりではなく、その組織の構造図や意思決定の機構などについてももっと踏み込んだ記述が必要だという意見も出た。

これらの問題点にも関わらず、隣国の「チャルガ」(ブルガリア)、「マネレ」(ルーマニア) などについて個別研究も現れ始めていることを考えると、本論文の内容が、たとえば英語で発表されれば国際的にも注目を集めることは間違いない。上記に指摘された課題についても、学位申請者自身よく理解しており、今後の研究の基礎として本論文の重要性は十分に認められる。

以上のような点から見て、本論文は、セルビアの大衆文化研究として重要な成果であり、博士 (文学) の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。